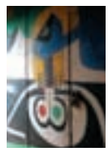
ル・コルビュジエの描いた『輝く都市』

Section 2

❖ 光に戯れる白い建築

染谷正弘＝写真・文



20世紀初頭にル・コルビュジエが打ち出した革新的な近代都市計画案や近代建築に迫ります。連載2回目は、彼が近代建築の本質を結晶化した20世紀不朽の名作「サヴォワ邸」をご紹介します。

ル・コルビュジエは、20歳代のほとんどを、ヨーロッパ諸都市を建築行脚して過ごしている。建築教育を受けなかった彼にとって、この若き日の旅こそが、彼の建築の師となり、彼の建築の創造力の源泉となっていく。その建築行脚で体験し学んだすべてを醸成、結晶化させた建築が、サヴォワ邸だ。パリ郊外のポワッシーに建つこの週末住宅は、木々に囲まれた広い芝生の庭に舞い降りた白い箱の宇宙船のようであり、原っぱに展示された幾何学形象のオブジェのようでもある。また、その白い列柱やシンメトリカルな三層構成のその姿は、西欧古典主義建築の原型とされるギリシャのパルテノン神殿を髣髴（ほうふつ）とさせずにはおかない。

20世紀初頭、革新に満ちたサヴォワ邸を実現したル・コルビュジエは、同時に「近代建築のための5原則」という建築デザイン提案をしている。大地から建築を切り離す〈ピロティ〉、第二の大地となる〈屋上庭園〉、多様な暮らし方を可能にする〈自由な間取り〉、たくさんの自然光を取り入れる横長の〈水平窓〉、そして建築の内外を一体化する〈自由な立面〉の5つだ。それによって、光と緑豊かな空間が実現され、近代生活を享受する理想の建築は誕生すると彼は言う。

建築を柱と梁から成るフレーム構造にし、壁を重力から開放することによって初めて「近代建築のための5原則」は実現される。ル・コルビュジエは、厚く重い石積みの壁を構造主体とする西欧の伝統建築を、その構造の成り立ちから変革し、鉄とコンクリートとガラスの明るく軽やかなフレーム構造の近代建築を目指したのである。そして、彼は、さらに柱と壁を「線」と「面」に、また建築全体を「幾何学形態」へと形象化してしまった。

サヴォワ邸の中心を貫くスロープを歩いていると、光と影が織り成す幾何学形象の世界に紛れ込んだかのような錯覚を覚える。そこは、画家ル・コルビュジエが描く抽象絵画の世界そのものだ。彼は、そのデザインの発想を、若き日の旅で訪れたギリシャで得たように思う。地中海の青い空の下に広がる建築群は、神殿も集落もすべてが白い。その光景は、まるで真っ白な幾何学形象が光に戯れているかのようである。

スイスのジュラ山麓に生まれ育ったル・コルビュジエは、明澄な地中海世界に理性の光を見たに違いない。そこは、西欧文明の故郷だ。彼は、その理性の光に、旅で出会った近代文明の「機械」をも重ね合わせて見ている。ジュラ山脈のジュラは、ケルト語で「森」を意味するという。スイスの森を越えて、さらに暗くて深い森のゲルマンの国々に、彼は、近代建築という白い幾何学形象に結晶化させた近代の理性の光を解き放ちたかったのではないだろうか。その光は、さらに『輝く都市』へと結実していく。

そめや・まさひろ／建築家・文化女子大学講師・DSA住環境研究室代表。「コミュニティデザイン」という計画概念の基に大規模集合住宅のデザインプロデュースを多く手掛ける。作品にシティア（千葉県我孫子市）、リボンシティ・レジデンス（埼玉県川口市）、大宮ファーストプレイスタワー（埼玉県さいたま市）等

サヴォワ邸の原風景、地中海世界の白い建築群

「ギリシャのパルテノン神殿が持つ完璧さが、現代では機械化によって自動的に再現できる。機械化は、完全さを生み出す有効な手段、美ではなく調和を目差す」とル・コルビュジエは言う。彼は、光輝く地中海世界の白い建築群に「近代」を発見する。
上／ギリシャ・アテネのパルテノン神殿　中／ギリシャ・ミコノス島の集落　下／サヴォワ邸の外観

建築の内外を一体化する“自由な立面”

一体空間となった屋上庭園と居間を見る。白い柱だけが建築を支え、壁は消えてガラスが室内外を仕切っている。スクリーンとなった立面は素材も形も自由、室内外を自由につなぐ

大地から建築を切り離す“ピロティ”

車寄せのピロティから白い列柱と芝生の庭を見る。大地を有効利用するために、壁を消して建築を宙に浮かせてしまう仕掛けがピロティ

サヴォワ邸に見る「近代建築のための5原則」

建築の構造形式は、石造系の壁式構造と木造系のフレーム構造の二つに大別される。フレーム構造を採用して、重い石の壁を軽いスクリーンに変身させて「近代建築のための5原則」は実現する。サヴォワ邸の革新性はそこあった。

たくさんの自然光を取り込む“水平窓”

居間の壁いっぱいに横に伸びる水平窓、壁から分離された白い柱。建築の構造主体を壁（面）から柱（線）へと変革することで可能なデザイン手法は、椅子のデザインにも見られる

第二の大地となる“屋上庭園”

屋上庭園から居間の大開口部と階下の庭を見る。陸屋根の屋上庭園は、必然的に建築を箱にする。近代建築に伝統的な勾配屋根はない

多様な暮らし方を可能にする“自由な間取り”

エントランスホールを見る。ガラス越しの緑を背景に、円柱（中央）、らせん階段（右）、スロープ（左）が、白い幾何学形象となって戯れているかのよう。規則正しく白い柱が建ち並ぶ空間を、白い壁が自由に軽快に間仕切り、近代建築は出現する

ル・コルビュジエ

1887年スイス生まれ。1917年以降パリに定住し、建築や都市計画、家具デザインなどに従事。「近代建築の巨匠」として知られる。彼の都市理論を綴った著書『輝く都市』は、翻訳版が鹿島出版会より出版されている。